

エッセイ

プロコフィエフの「越後獅子」コンチェルト

笠谷 和比古

ロシアの作曲家プロコフィエフ (Sergei Prokof'ev 1891～1953) と言えば、小中学校の音楽の時間で習ったのは『ピーターと狼』の音楽劇だし、バレエの好きな人なら『ロメオとジュリエット』を一番に挙げるであろう。

そのプロコフィエフ、作曲家だけれどピアノの名手でもあり、多くのピアノ曲を残し、ピアノ・コンチェルトも五曲を数える。いずれも高度のピアノテクニクが求められるが、中でも超絶技巧で名高いのが第三番のコンチェルト。殊にその第三楽章の演奏はピアノ演奏の極限に位置していると言って過言ではないであろう。ピアニストにとって演奏は文字通り修羅場と化し、その十本の指は鍵盤のうえを怒濤のごとくに駆けめぐり、あらん限りの生命力の燃焼を求める究極のピアノ・コンチェルトだ。

そんなことから筆者にとって好みの一曲となり、CDなどもあれこれ聴き比べて演奏ぶりを楽しんできたのだが、ある時、思いもかけない質問を受けた。プロコフィエフのこの曲の、まさに問題となっている第三楽章には日本の長唄「越後獅子」の曲が取り入れられているという



プロコフィエフ「ピアノ協奏曲第3番」第3楽章冒頭のアッコット・パート

ことだけれど、どこがそれですかというものであった。それは全く意想外の質問であり、文字通り絶句の体であった。

言われてみて、CDの解説などを読むと、確かにその言及がなされている。ただし真偽のほどは定かではないという断り書も共通しているようであるが。

私は前述のとおり、この曲についてはそのピアノの超絶技巧とオーケストラとの激戦模様のおもしろさを楽しんでいたもので、日本の長唄「越後獅子」なんか全く念頭になく、はたまた言われたところで、この曲のいったいどこに、そんなものがあるというのだ。どこに…。

この不思議な問題と取り組みながら、くり返し聴いているうちに奇妙なことに気づいた。ピアノの演奏を中心に聴いている時には（ピアノ協奏曲なのだからピアノを中心に聴くのは当然なのだ）意識にのぼらなかつた妙な音が幽かに鳴っているのに気がついた。それはこの第三楽章の冒頭にアッコットによって奏せられる上のような旋律である。

特に、この旋律の後半部分が確かに長唄風の和旋律だ！

ようやく見つけた。これを指して「越後獅子」を使ったという話になったわけだ。これで一件落着のようなのだが、それが分かると、逆に同時にたくさん疑問が生じてくることとなった。

第一に、この旋律は長唄「越後獅子」の中にある旋律なのかどうか。

第二に、プロコフィエフはなぜこのような旋律をピアノ協奏曲に用いたの

か。

第三に、この旋律はこのピアノ協奏曲の第三楽章のテーマ旋律のはずなのに、どうして弱音（p）で演奏されるのか。この第三楽章はA—B—Aという三部形式を用いており、再現部Aの冒頭にもやはりこの旋律がファゴットで奏せられるのだが、やはりここでも弱音の演奏指定のため、神経を集中していきなり聞きのがしてしまう。なかなかこの旋律を見出せなかったのは、このように弱音で幽かに演奏されるためである。なぜ重要な主題提示なのに、二度とも弱音の指定なのか。

第四として、これが重要なのであるが、なぜ主題提示がファゴットであって、主役であるピアノではないのかという疑問である。しかも二度の主題提示の機会に、二度ともにピアノではなくてファゴットであるという事実。

第五として、さらに重要なことに、このファゴットが奏している主題旋律を、協奏曲の主役であるピアノは弾いていないという事実！これは一体どういうことであろうか。ファゴットが冒頭で主題旋律を奏したとしても、それを受け継いで主役のピアノがその主題旋律を明確に奏するのであれば、特に問題にはならないかも知れない。

しかし第三楽章冒頭、ピアノはこのファゴットが奏した主題旋律を引き継ぐ形で弾きけれど、それは最後が不協和音で終わってしまい、主題提示となりえていない。なぜ主題提示の場面で不協和音なのか。これは重要な問題の伏在を伝えるメッセージではないのか。

第六として、第五の問題を強化することになるのだが、この第三楽章の全体を通して、主役であるピアノはファゴットが提示した主題旋律をそもそも弾いていないのではないかという疑問がある。三部形式のAの部分に一箇所、近似的な旋律を奏するところがあるのみである。ピ

アノは主題旋律の周囲をとめどもなく、疾駆するがとき勢いで演奏するのだが、遂に主題旋律そのものは弾かないままに、オーケストラとともに近似的な旋律をもったユニゾンの強奏でこの曲を終えるのである。

この曲はいったい何なの？ 聴けば聴くほどに謎は深まるばかりである。かつてこの曲に抱いていた熱狂とは別の種類の感興が、とめどもなく湧き起こってきた。この曲に秘められた謎、それは取りもなおさず、右に掲げた六つの疑問と関わっている。しかも問題の核心に長唄「越後獅子」が関わっているとあっては、なおのことである。

まず、プロコフィエフと日本文化との接触の問題から見ていきたい。

プロコフィエフが日本を訪れたのは、一九一八年五月末のこと。おりから母国で発生したロシア革命の脅威を避けたため、アメリカに亡命するために経由地として日本を選んだことによる。日本に到着したけれど、アメリカ行きの船便に手違いが生じたために、彼はその後、同年八月までの二ヶ月間、日本に滞在することになった。そしてそれはプロコフィエフにとって、異文化の地、日本を探究できるまたとない機会を与えた。彼は東京を拠点にして、京都・奈良へと足を伸ばすなど日本各地を探訪している。

作曲家にして、日本という独特の文化地域に関心を抱かない人はいないであろう。日本は、あのプッチーニの名作オペラ『マダム・バタフライ』を世に送り出す原由をなした場所なのだから。プッチーニは日本を訪れる機会のないままに世を去ったけれども、いまプロコフィエフ

は、あの巨匠が自分のオペラのために採取して見事にアレンジして使用した数々の美しく、そしてエキゾチックな響きをもつ日本旋律が、原曲として奏でられているその場所にいるのだ。プロコフィエフが与えられた時間を活用して、これら日本旋律のオリジナルな演奏様態を観察し、研究していったであろうことは想像に難くない。そしてその中で、かの『マダム・バタフライ』においても重要な役割をはたしている長唄「越後獅子」のオリジナルを聴いていたであろうことも容易に諒解できる。日本ならば同曲のレコード盤も簡単に入手しえたであろう。

このような経緯があったことから、第三ピアノ協奏曲に「越後獅子」が使われたという言葉が現れてきたのも、むべなるかなである。

そしてまた、このような経緯があるので、同曲の主題旋律に「越後獅子」のそれが用いられていても、特に奇異とするには及ばないであろう。ただし、この旋律そのものについて見た場合、これが「越後獅子」の中に求められるかという点、どうも否定的であるようなのだけれども。これは寧ろ、プロコフィエフが自分で作り上げた彼オリジナルな和風旋律と見た方がよいのかも知れない。彼はかつて『古典交響曲』を作って、あのハイドンがもし現代に生きていたらこんな曲を書くのではないかというウィットの効いた作曲をしたことがあったが、その伝ではないだろうか。

旋律の由来についての研究はさらに続けられるべきであると思うが、筆者が問題視するのは

旋律の出所ではなく、この曲におけるその扱いをめぐる前述のいくつかの疑問点である。第一のものを除いた、残り五つの問題である。

この第三楽章は、ある和風旋律を主題とする超絶技巧的ピアノ協奏曲という構成になると思うのだけれど、なぜ主題旋律は二度ともファゴットによる提示であり、しかもピアノはこの主題提示をなしていないのであろう。展開部においてピアノは執拗にこの主題旋律の断片を奏するのであるけれども、いずれも主題旋律の周囲を駆けめぐるばかりで、ピアノ協奏曲における主役本来の役割を果たしてはいない。

この曲を見ていると、主役はファゴットであり、ピアノは協役の観がある。ファゴットが提示する主題を弾こうとして弾けず、しかもオーケストラの焚きつけるような騒然としたサウンドの渦の中で翻弄されるが如く、主題旋律の周辺を駆けめぐり、不協和音を奏でるといった図ではないであろうか。

このようにこの曲にまつわる疑問を眺めていくなら、ここには一つのストーリーが横たわっているのではないかと思わせるものがある。すなわち、ファゴットは異文化である日本のシンボルとして。ピアノはプロコフィエフその人として。ファゴットの奏でる、これまで経験したことのない日本の旋律に対する憧憬と困惑、名状しがたい混乱と焦燥。プロコフィエフは自分の体験を基に、遊び心をもってそんな音楽物語を作曲・作劇したのではないか、そんな幻想が湧き起こってくるのである。

筆者も本年三月末をもって停年を迎える。このエッセーは日文研で書く最後の文章となることであろう。最後のエッセーに、本職の歴史学関係の事柄ではなく、クラシック音楽談義かと響盤を買うかも知れないが、これが日文研なのである。本来の専門領域は大切にしつつも、そこにとどまっていたはならない。そこからどれだけ飛翔できるか、どれほど翼を広く開くことができるか、他分野の問題と、他領域の研究者と、どれほどに交わり、どれほど積極的に関わって、生産的な議論と成果を産出できるかが求められている。いずれの学問分野においても専門細分化が進行し、研究者は蛸壺状態に置かれる状況であればなおのこと、そのような知的冒険が求められるのである。

日文研では、伝統文化プロジェクトが二〇〇四年以来設けられ、筆者がその長をつとめて一〇年が経過した。長唄「越後獅子」がテーマとなった今回の問題は、その意味において日文研への置き土産として格好の話題となったかも知れない。読者諸賢の御教示、御叱正を請うのみである。

(日文研伝統文化プロジェクト長／国際日本文化研究センター教授)